みんな うれしい クリスマス

文●マックス・ルカド
画●ブルーノ・メルツ
訳●女子パウロ会

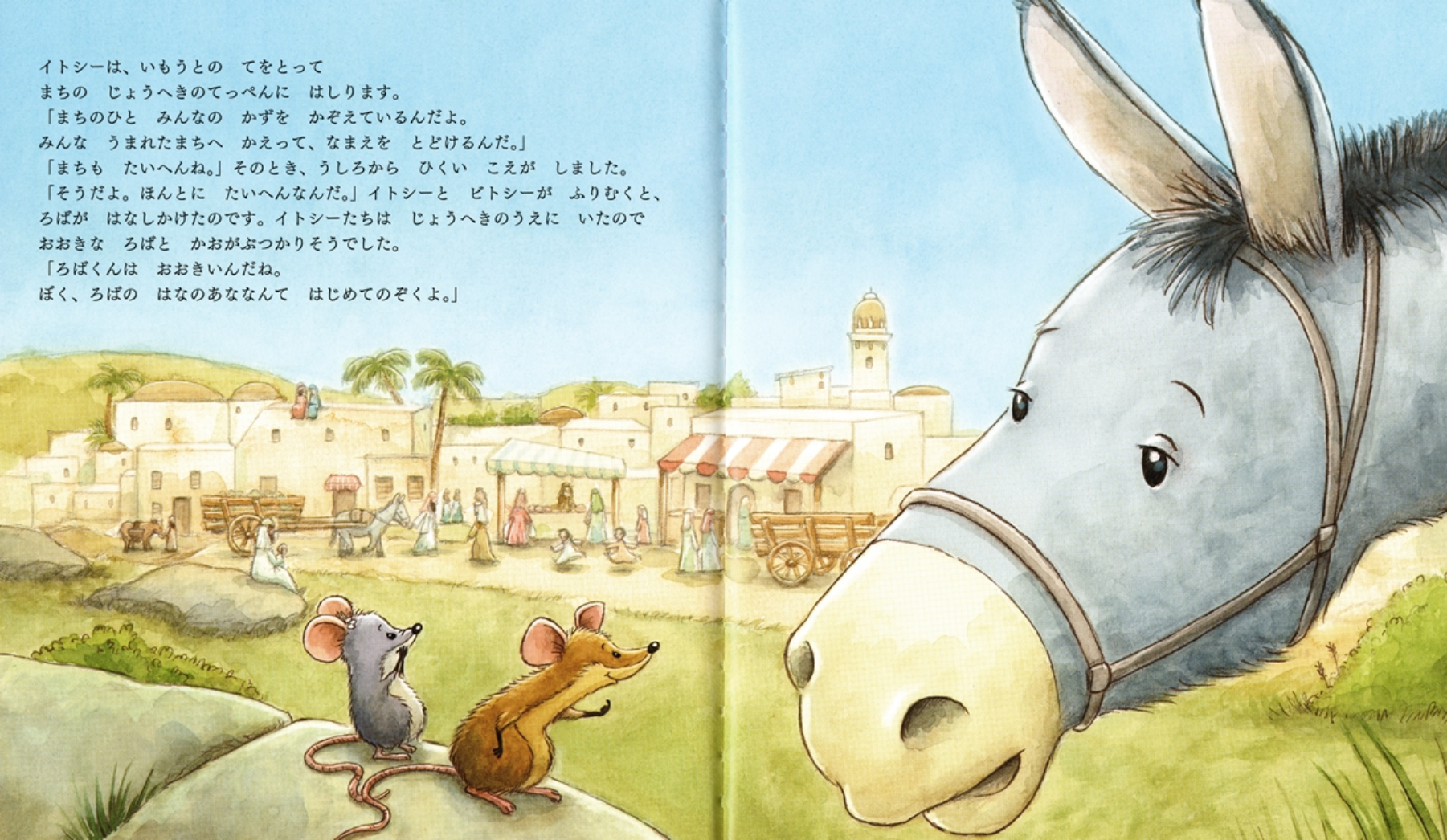
みんな うれしい

クリスマス

文●マックス・ルカド
画●ブルーノ・メルツ
訳●女子パウロ会

女子パウロ会

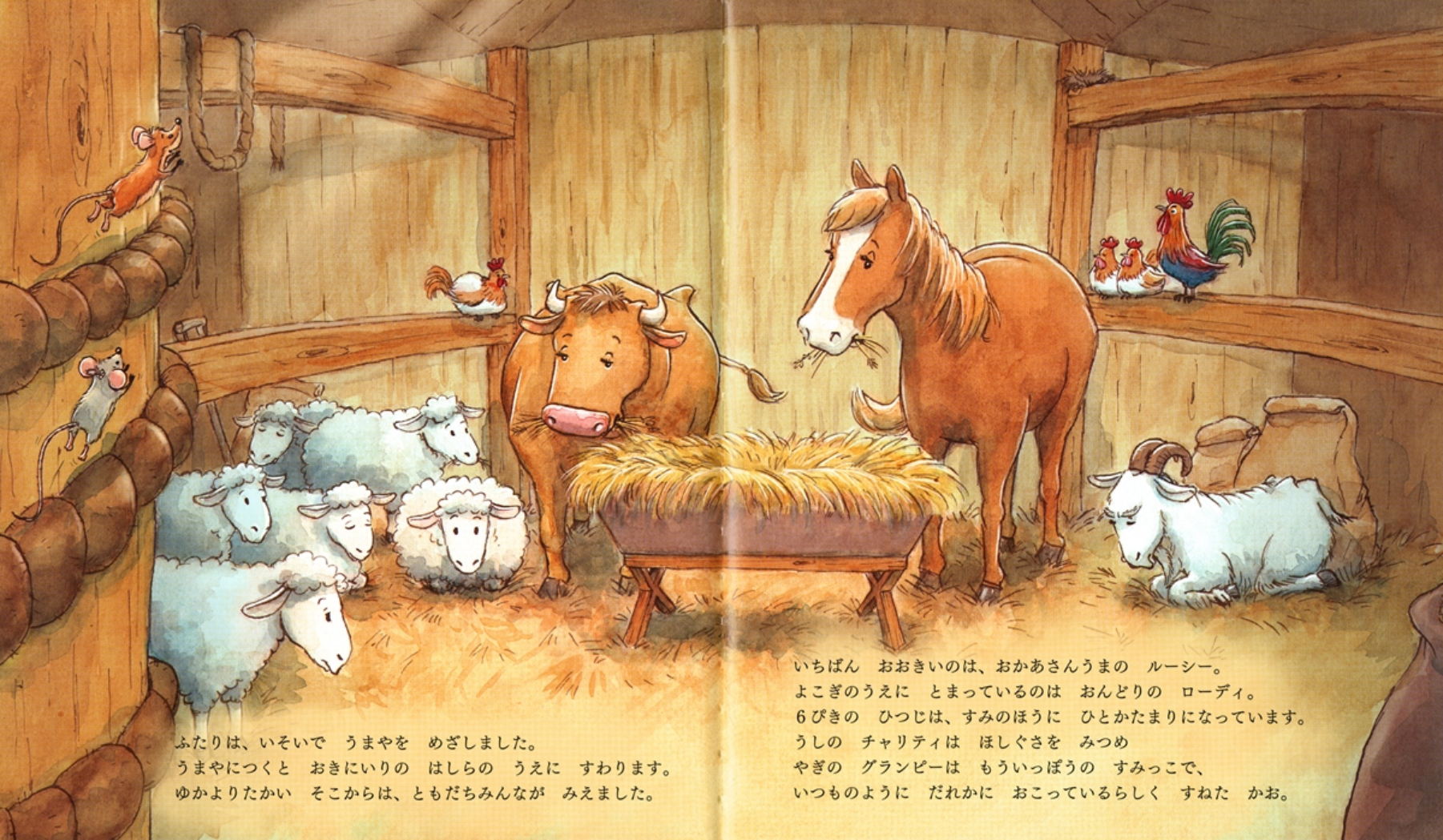
「あぶない、ビトシー！」おにいちゃんのイトシーは、
ききいっぱつのところで　いもうとの　しっぽを　つかんで　ひっぱります。
「きをつけなきゃ　だめじゃないか。くるまに　ひかれたら　どうする。」
ビトシーは、ジャンプして　おおきく　いきを　すいました。
おおきなめを　ますます　おおきく　みひらいて　さけびます。
「ベツレヘムの　まちに　こんなに　おおぜいのひとが　ゆききするなんて
はじめてね。どこも　かしこも　くるまが　いっぱい。
うしは　ないているし、ろばは　ひっぱられ、らくだだって……
う〜ん、にいちゃん、らくだが　なんてなくか　しってる？
ねえ、なにが　おきたのかしら？」
にいちゃんねずみは　いいました。「おいで。みにいこうよ。」



イトシーは、いもうとの　てをとって
まちの　じょうへきのてっぺんに　はしります。
「まちのひと　みんなの　かずを　かぞえているんだよ。
みんな　うまれたまちへ　かえって、なまえを　とどけるんだ。」
「まちも　たいへんね。」そのとき、うしろから　ひくい　こえが　しました。
「そうだよ。ほんとに　たいへんなんだ。」イトシーと　ビトシーが　ふりむくと、
ろばが　はなしかけたのです。イトシーたちは　じょうへきのうえに　いたので
おおきな　ろばと　かおがぶつかりそうでした。
「ろばくんは　おおきいんだね。
ぼく、ろばの　はなのあななんて　はじめてのぞくよ。」

「あなたは　だあれ？　どこからきたの？」と、ビトシーがききました。
「ぼくは　ろばの　ダニエル。とおいまちから　きたんだ。おうさまが
ベツレヘムへ　いらっしゃるというから。」
「えっ、おうさまが？」「うん、きいたこと　なかった？」
「だって、ベツレヘムは　とても　ちいさい　まちなのよ。」
「うん、このおうさまは　とくべつなんだ。えらいもののためにも、
ちいさいもののためにも、みんなのために　いらっしゃるんだ。」
「わたしたちみたいな　ちいさいもののためにも？」
「そう、きみたちのためにもさ。」

ビトシーは、ひげを　ぴくぴくさせながら、
にいさんを　ふりかえります。
「イトシー、おともだちにも　しらせなきゃ、ね。」
「そうだね、そうだね。」イトシーも　だいさんせい。
「みんな　おうさまに　あいたいよね。」



ふたりは、いそいで　うまやを　めざしました。
うまやにつくと　おきにいりの　はしらの　うえに　すわります。
ゆかよりたかい　そこからは、ともだちみんなが　みえました。

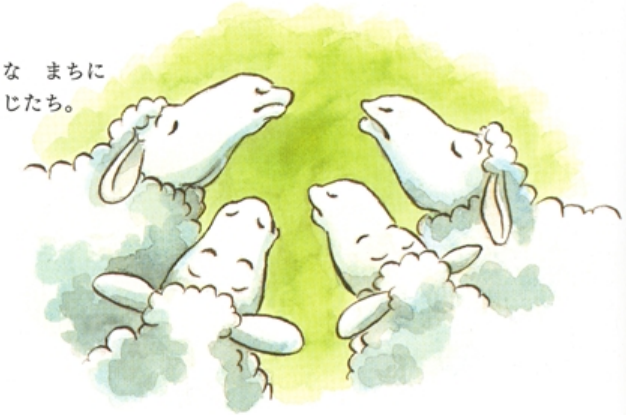
いちばん　おおきいのは、おかあさんうまの　ルーシー。
よこぎのうえに　とまっているのは　おんどりの　ローディ。
6ぴきの　ひつじは、すみのほうに　ひとかたまりになっています。
うしの　チャリティは　ほしぐさを　みつめ
やぎの　グランピーは　もういっぽうの　すみっこで、
いつものように　だれかに　おこっているらしく　すねた　かお。

イトシーは　てを　くちにあてて　さけびました。
「お〜い、みんな　おいでよう。はなしたいことが　あるんだ。」
だれも　うごきません。ビトシーも　おおごえで　さけびます。
「ビッグニュースなのよ！」
だれも　こたえてくれません。
ビトシーは　にわとりの　ローディのほうをむいて　いいました。
「たすけてくれない？」
「いいよ、さわぐためなら、なんだってかまわないさ。」
そして、くびをそらせて　おおきく　なきました。

やぎの　グランピーが　うなっていいます。
「し〜っ！　しずかに。ぼくは　おひるねしたいんだよ。」
ビトシーは　だまりません。
「でも、わたしたちには　いい　ニュースがあるのよ。」
「なんだよ。ひっこしでもするって　いうのかい。」
すると、うまの　ルーシーが　いいました。「だまって！　しずかに。」
そして、イトシーと　ビトシーに

「そのだいじな　ニュースを　おしえてちょうだい。」
「おうさまが　ここ　ベツレヘムに　くるんだ。
ぼくたちのために。」しばらく　みんな　だまって、
それから　ローディが　おおきなこえで　いいました。
「おうさまが　ここにだって？
おうさまは　おおきな　まちに　くるものだよ。」
ひつじも　うしも　みんな　いっせいに　おおごえを　あげました。
「そうだ、そうだ。そんなこと　いままで　あったことない。」

「おうさまは　だいじな　まちに
くるものさ」と、ひつじたち。



「そうだよ、えらいひとたちの
ところにだよね」と、
グランピーがさんせいします。

うまの　ルーシーはいいます。
「イトシー、ビトシー、ここは、
どこにでもあるような
ちいさいまちだから、おうさまが
くるとは　おもえないね。」

イトシーはビトシーをみつめました。
「じゃあ　ぼく、いもうとといっしょに
おうさまを　みつけにいきます。」
グランピーが　くすくすわらって
いいました。
「せいぜい　がんばるんだね。」

「おうさまに　あいに！　おうさまに　あいに！」
ビトシーは　いきおいよく　はしらから　とびおりて　とおりに　でました。
「イトシー、おうさまには　どこで　あえるかしら？」
「う〜ん、えらいひとって　どこに　いるかな。」
「そうだ、まちのもんのところに　いこうよ。」
もんのところでは　まちのリーダーたちが　なにか　そうだんしているみたい。
ふくろうもいます。ビトシーがさけびました。
「ふくろうさん、ベツレヘムに　おうさまが　くるって　きいたけど
おうさまを　みましたか？」
ふくろうは　こたえました。「このちいさなまちに　おうさまが　くるって？
ここじゃ、おうさまなんて　みつからないよ。」
そう、おうさまは　まちのもんのまえにいる　えらいひとたちの　ところにも
こなかったようです。